「鳥蟲篆の字体判別に文字変形が与える影響」

デザイン学科　髙城光　Hikari Takashiro

鳥蟲篆（ちょうちゅうてん）は、約 2000 年前に中国大陸で発生した書体である。最初は青銅器を装飾するために、その後は印璽（いんじ）にも転用された。漢時代以後廃れたが、後には芸術的な篆刻作品に使われている。

鳥蟲篆の特徴は、激しい装飾である。字画が幾重にも折り重なり、独特の曲線を描いている。時々、文字の中に鳥や動物の模様が描かれているが、文字の字画と描線を共有していて、模様が文字の一部に融合している。

こうした特徴は、それまでの書体（甲骨文、西周金文など）とは一線を画すものだ。それまでの書体が「読む」ための書体だとすれば、鳥蟲篆は「見る」ための書体である。文字が「読む」ことと「見る」ことの 2 つの機能を持ち、言葉と形の関係性によって表現するということは、現代にまで続くあらゆる「文字芸術」の基礎である。仮に鳥蟲篆が「言葉と形の関係性」を獲得した最初の書体だとすれば、鳥蟲篆は「文字芸術の起源」だと言える。そこで、本研究では、鳥蟲篆に「読む」機能があることを確かめるため、その字体を検証している。

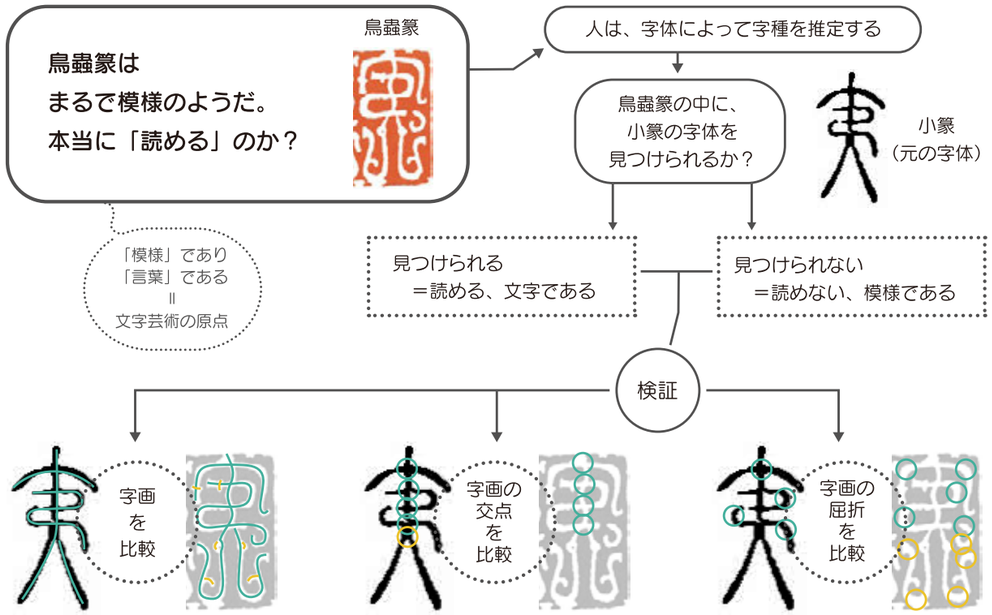
2013 年多摩美術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了。同大学グラフィックデザイン学科助手を経て、2018 年より東京工芸大学芸術学部デザイン学科助手。大学在学中よりタイポグラフィ研究を始める。言葉を「読む」と同時に形を「見る」ことによる文字の伝達機能の総体について、金文書体、篆書体の字形を通して研究している。日本デザイン学会、芸術工学会、日本漢字学会会員。
h.takashiro@dsn.t-kougei.ac.jp

そもそも鳥蟲篆が「書体」であるという前提で論ずるためには、まず、一見して「読む」ものとは思えない鳥蟲篆が、紛れもない「文字」であるということを、示さなければならない。

鳥蟲篆が使われた時代の文字は、今の漢字とは、字体（字画の構造）が違う。現代人の私たちには、たとえ装飾のないシンプルな書体であっても、専門知識なしには読むことができない。このような文字を、当時「読む」ことができたかどうかは、私たちには知るすべがない。

そこで本研究では、「字体」を、鳥蟲篆が文字であることの基準として採用し、小篆と鳥蟲篆の字体を比較している。「字体」とは、文字からあらゆる装飾を取り払った後に残る、字画の組み合わせ＝構造である。字体は、文字の字種の根拠とされている。字体に変化がなければ、文字の種類を特定することができ、「読む」ことができる。小篆は当時使われていた装飾の少ない書体で、鳥蟲篆は、小篆の字体に装飾を加えた形であることが多い。

小篆と鳥蟲篆の比較は、「字画そのもの」「屈折点」「交点」という 3 つの観点から行なっている。このポスター発表では、その比較方法について説明している。比較の結果は、今後いくつかの学会で発表する予定であり、その予定もポスター内に知らせている。



鳥蟲篆（夷吾）および小篆（夷）の画像は 全て『鳥蟲篆大鑑』（丸山樂雲編 東京堂出版 1989）からの引用である。